

改訂の序

大腸腫瘍の内視鏡診療において重要なことは「内視鏡挿入手技・診断学・治療手技の3つ」で、どれ1つ欠けてもきちんとした診療は成立しない。大腸内視鏡がスムーズに挿入できなければ、正確な診断や治療はできないし、内視鏡の挿入手技を習得できても、正しい診断学が身についていなければ正しい治療法の選択はありえない。また、治療手技が未熟であれば十分な治療はできない。このような背景のもと2008年に羊土社から「大腸腫瘍診断」という大腸内視鏡診断学をマスターする実践的入門書を発刊させていただいた。おかげさまで大好評を得て多くの内視鏡医の先生に購読いただいた。

2012年4月に大腸ESDが保険適用になってEMRとともにESDも一般化しつつあり、正確な術前診断に基づいた両者の棲み分けが重要になっている。また、SM (T1) 癌の取扱いも新たな展開を向かえている。このような時代の変化に追従するための内視鏡診断学としては、通常内視鏡、超音波内視鏡に加えて、拡大内視鏡、最新の画像強調観察 (NBI, BLI など) など多くの微細診断学を理解しなくてはならず、若い先生が習得すべき内容は多い。しかし、最近多くの内視鏡医がESDのマスターに没頭し、その前段階の診断学が少し軽視されているように感じる。前述のごとく、正しい治療手技の選択には正確な診断学が必須であり、診断学総論の概念的な理解ではまったく不十分で、個々の症例に実際に対処できる実践力が必要なのである。各地で診断学習得のための症例検討会も多く開催されてはいるが、不十分な材料や指導医不在の検討会ではその効果も薄い。

このような状況のなかで、最新の大腸腫瘍内視鏡診断学をより簡単に習得するための新たな入門書として改訂版を発刊することになった。改訂版では、基本事項を中心にその道の専門家が初学者にわかりやすくガイドラインなどの最新情報を平易に解説している。最大の特徴は前版と同様に第5章のCase Study (Q & A) により実践感覚が身につくよう工夫していることであるが、実践力を身につけるために可能な限り新しい症例に差し替えていただいた。そして、診断のコツやピットフォール、鑑別診断学が図表、コラム、美しい症例画像とともに詳述されている。また、内視鏡挿入法や疫学・検診の情報が詳述されている点も素晴らしいと思っている。本書の記述は非常に平易で、大腸腫瘍の診断・内視鏡治療に携わる先生が繰り返し熟読して下されば、必ず明日からの診療にお役に立つものと確信している。本書が内視鏡診療に日夜研鑽を積み重ねられている若い先生の座右の書となれば望外の喜びである。

最後に、大変お忙しいなか快く執筆をお引き受け下さった諸先生に厚く御礼申し上げるとともに、このような機会を与えて下さった羊土社の諸氏に感謝する次第である。

2014年10月

広島大学大学院医歯薬保健学研究科内視鏡医学
広島大学病院内視鏡診療科
田中信治

初版の序

大腸癌の罹患率や死亡率は年々増加しており、大腸内視鏡を用いた大腸腫瘍の診療はますますその需要と重要性を増してきている。大腸腫瘍の内視鏡診療において重要なことは「内視鏡挿入手技・診断学・治療手技の3つ」であり、どれかひとつ欠けてもきちんとした診療は成立しない。大腸内視鏡がスムーズに挿入できなければ、正確な診断や治療ができるはずがないし、内視鏡の挿入手技を習得できても、正しい診断学が身につけていなければ正しい治療法の選択はあり得ないからである。

近年の内視鏡治療手技の進歩は著しく、多くの内視鏡医がEMRやESDなどの治療手技を一生懸命勉強しており、学会のビデオシンポジウムや各地の内視鏡ライブデモンストレーションが盛んである。しかし、現実には、内視鏡治療手技の習得のみを目指す若い先生が多く、診断学が少し軽視されているように感じる。前述のごとく、正しい治療手技の選択にはきちんとした診断学が必要であり、総論や概念的な理解ではなく、個々の症例に実際に応用できる診断能力を身につける必要がある。診断学の最近の進歩はめざましく、通常内視鏡観察、超音波内視鏡観察などの基本手技に加えて、拡大内視鏡観察、NBI/FICEなどの画像強調観察 (Image-Enhanced Endoscopy : IEE) など多くの微細診断学が臨床の場に普及しつつある。ただ、多くのかかり細かい所見を理解しなくてはならず、若い先生が取りかかるきっかけを逸しているようにも感じる。

このような背景のもとで、後期研修中の若い先生、あるいは、後期研修以降でも勉強しようと意欲のある先生が、最先端の内視鏡診断学を実践的にマスターするために必要な入門書を企画させていただいた。

本書は、基本的事項を中心に初学者にわかりやすく平易に解説することとし、応用方法については症例提示を中心にわかりやすい解説を加えた。また、コツとPitfall, Point, メモ, 用語解説などを用いて、注意すべきあるいは覚えるべき点を明確に示すようにした。本書最大の特徴は5章のCase Study (問題形式) でより実践感覚が身につくよう工夫したことであり、その解説には重要項目やポイント、鑑別診断を図表、参考症例などが盛り込まれ充実している。本書の内容はきわめてわかりやすく、大腸腫瘍の診断・内視鏡治療に携わる先生が繰り返し熟読して下されば、必ず明日からの診療にお役に立つものと確信している。本書が内視鏡診療に日夜研鑽を積まれている若い先生方の座右の書となれば望外の喜びである。

最後に、大変お忙しいなか快く執筆をお引き受け下さった先生方に厚く御礼申し上げるとともに、このような時を得た企画を組む機会を与えて下さった羊土社の嶋田達哉氏、林理香氏に感謝する次第である。

2008年9月

広島大学病院光学医療診療部

田中信治